



いまを知るためのとば、学問、本



「頭山満と近代日本」 大川周明著、中島岳志編著

四六判上製208頁／230円 ISBN978-4-86110-134-2

「明著『頭山満と近代日本』が好評、名々スマッシュでも大

き取り上げられた。

A級戦犯として起訴され

た革新右翼の理論家・大川

周明が、伝統右翼の巨人・

頭山満を描いた評伝であ

る。敗戦直前のじどだの

中で書かれたが、未完のま

まお蔵入りになった「父の

原稿」だった。

編者の中島岳志は、

「たとえ発見されていて

も、十年前だつたらせつた

いに出せない本だった。状

況が変わった」と感慨深く

に語る。

この一事に裏打ちされるよ

うに、ナショナリズムや右

翼思想についての議論の活

化だろう。ポストモダン

思想についての議論の活

化だらう。

「いま」を、私た

ちはどう捉えたらしいのだ

うか。

こんな「いま」において、

じとじとんだわり続けること

はとうじょうことなのか。そ

うした疑問と好奇心をもつ

て、新连载・特集を多数用

意し「春風日録新聞」第2

号をお届けする。

思想の退潮も、大きな動き

の一つか。いつばう大学で

は、実学重視、教養科目削

減の動きが加速している。

古風の新訳ノーブルなどは

中で書かれたが、未完のま

まお蔵入りになった「父の

原稿」だった。

編者の中島岳志は、

「たとえ発見されていて

も、十年前だつたらせつた

いに出せない本だった。状

況が変わった」と感慨深く

に語る。

この一事に裏打ちされるよ

うに、ナショナリズムや右

翼思想についての議論の活

化だらう。

「いま」を、私た

ちはどう捉えたらしいのだ

うか。

こんな「いま」において、

じとじとんだわり続けること

はとうじょうことなのか。そ

うした疑問と好奇心をもつ

て、新连载・特集を多数用

意し「春風日録新聞」第2

号をお届けする。

思想の退潮も、大きな動き

の一つか。いつばう大学で

は、実学重視、教養科目削

減の動きが加速している。

古風の新訳ノーブルなどは

中で書かれたが、未完のま

まお蔵入りになった「父の

原稿」だった。

編者の中島岳志は、

「たとえ発見されていて

も、十年前だつたらせつた

いに出せない本だった。状

況が変わった」と感慨深く

に語る。

この一事に裏打ちされるよ

うに、ナショナリズムや右

翼思想についての議論の活

化だらう。

「いま」を、私た

ちはどう捉えたらしいのだ

うか。

こんな「いま」において、

じとじとんだわり続けること

はとうじょうことなのか。そ

うした疑問と好奇心をもつ

て、新连载・特集を多数用

意し「春風日録新聞」第2

号をお届けする。

思想の退潮も、大きな動き

の一つか。いつばう大学で

は、実学重視、教養科目削

減の動きが加速している。

古風の新訳ノーブルなどは

中で書かれたが、未完のま

まお蔵入りになった「父の

原稿」だった。

編者の中島岳志は、

「たとえ発見されていて

も、十年前だつたらせつた

いに出せない本だった。状

況が変わった」と感慨深く

に語る。

この一事に裏打ちされるよ

うに、ナショナリズムや右

翼思想についての議論の活

化だらう。

「いま」を、私た

ちはどう捉えたらしいのだ

うか。

こんな「いま」において、

じとじとんだわり続けること

はとうじょうことなのか。そ

うした疑問と好奇心をもつ

て、新连载・特集を多数用

意し「春風日録新聞」第2

号をお届けする。

思想の退潮も、大きな動き

の一つか。いつばう大学で

は、実学重視、教養科目削

減の動きが加速している。

古風の新訳ノーブルなどは

中で書かれたが、未完のま

まお蔵入りになった「父の

原稿」だった。

編者の中島岳志は、

「たとえ発見されていて

も、十年前だつたらせつた

いに出せない本だった。状

況が変わった」と感慨深く

に語る。

この一事に裏打ちされるよ

うに、ナショナリズムや右

翼思想についての議論の活

化だらう。

「いま」を、私た

ちはどう捉えたらしいのだ

うか。

こんな「いま」において、

じとじとんだわり続けること

はとうじょうことなのか。そ

うした疑問と好奇心をもつ

て、新连载・特集を多数用

意し「春風日録新聞」第2

号をお届けする。

思想の退潮も、大きな動き

の一つか。いつばう大学で

は、実学重視、教養科目削

減の動きが加速している。

古風の新訳ノーブルなどは

中で書かれたが、未完のま

まお蔵入りになった「父の

原稿」だった。

編者の中島岳志は、

「たとえ発見されていて

も、十年前だつたらせつた

いに出せない本だった。状

況が変わった」と感慨深く

に語る。

この一事に裏打ちされるよ

うに、ナショナリズムや右

翼思想についての議論の活

化だらう。

「いま」を、私た

ちはどう捉えたらしいのだ

うか。

こんな「いま」において、

じとじとんだわり続けること

はとうじょうことなのか。そ

うした疑問と好奇心をもつ

て、新连载・特集を多数用

意し「春風日録新聞」第2

号をお届けする。

思想の退潮も、大きな動き

の一つか。いつばう大学で



JR新宿駅南口を出て右に曲がると、西新宿一丁目の交差点に出る。信号が変わるために四方から大勢の人があふれ出し、無関心な他人の脇をすり抜けていく。見上げると、消費者金融の派手な看板が乱立している。

この交差点を南に行くと、右手にホテルサンル

トプラザ新宿と地上三階建ての超高層ビル・新宿マイスタワーがそびえ立つ。財布を小脇に抱えたO工が屋食の弁当をもとめて小走りで、猫背気味のサラリーマンは歩道に立ち止まって携帯電話の画面を凝視している。

私は彼らを横目に見る。谷間のベンチに腰を下ろす。左手にホテルサンル

思想の場所

一 新宿南口

中島岳志

(著者略)

静かに目を閉じて耳を澄ます。街の音の隙間から、風に漏れる葉音が漏れ出しつぶやくその音を頬づけ、時間を運んでくる。

*

北は「三歳のとき」に『国体論』及び『純正社会主義』を自費出版。辛亥革命を契機に中国へ渡り、革命運動を支援した。彼は中国滞在中に『国家改造原理大綱』の出稿を執筆し、大川周明の要請に促されて帰國。昭和維新運動を牽引した草新石川の源流とされる舊洋社の中心人物として活躍した。

新宿の大邸宅には、もと

大正から昭和初期、こ

とに曲がる。西新宿一丁目の交差点に出る。信号が変わるために四方から大勢の人があふれ出し、無関心な他人の脇をすり抜けていく。見上げると、消費者金融の派手な看板が乱立している。

この交差点を南に行くと、右手にホテルサンル

トをつとめ、ここで共同生

活を行っていた。しかし、

大川は、日本に滞在中

だったフランスの哲学者、

ポール・リシャールのホス

トをつとめ、ここで共同生

活を行っていた。しかし、

新連載

1 ポストモダンの処方箋

1 壊乱をもたらす
概念としての
ポストモダン――

この度「ポストモダン」の処方箋と題する連載を始めたことにになった。どのような議論を展開することになるのか、筆者としてもまだ考へは完全にはまつてこないが差し当り「ポストモダン」という言葉に

よって何を語ることができるか、という問いを立てみたい。

すでに「ポストモダン」という言葉において強い疑惑を表明している。また「ポストモダン」なる時代区分の正当性について、また「ポストモダン」の代わりに「再帰的近代」(reflexive modernity)といつた用語を用いる理論家もある。あるいは現代社会の最も有力な趨勢と見なされている「新自由主義」は果たしてポストモダンといつかなる関係を有しているのか。

いわゆる「オリエイ」の身も蓋もない原理によつてポストモダンなるものは

すでに「ポストモダン」という言葉に

よつて何を語ることができるものか、筆者としてもまだ考へは完全にはまつてこないが差し当り「ポ

ストモダン」という言葉に

どうした用語をめぐる抗争、ある「これは言説」

における「モード一闘争」と

すつかり駆逐されてしまつたのであらう。

そのため「モード」

を以上のものと定義した瞬間でそれはほとんど無効である。すなはち、「モード」

はすでに「ポストモダン」

の定義に陥つてゐる。われわれの安定した歴史

の見取り図を混乱に陥れ

たのであらう。

そのため「モード」

は、筆者が関心がない。筆者

が今後の考案の前提にして

いたと思つてゐるのは、こ

とが、筆者によつては誤解され

たのである。その意味で、研究室は

まだ「モード」の定義を

もつたく不當ではある

が、筆者によつては誤解され

たのである。そのため、近

いに思想中をもじり返す

ことは、近代そのものを

考へることもある。近

いに思想中をもじり返す